

ユーザーのパーソナリティと、 サイバー犯罪被害の関連についての検討

佐藤 花乃 (22011150hs@tama.ac.jp)

1. 問題と目的

サイバー犯罪の被害とインターネットを利用するユーザーに焦点を当て、その関係について検討を行う。パーソナリティの側面を見て、どのような人がどんな被害に遭いやすいのか、遭い辛いのかについて検討する。

2. 方法

調査対象者 多摩大学に在籍する学生 10 名と他大学に在籍する学生 2 名の計 12 名。

調査日時 2023 年 11 月 23 日～12 月 13 日

手続き Google form を使用しアンケートを作成した。リンクを読み取って貰い、アンケートへの回答協力を求めた。

質問構成 性格特性(短縮版 Big Five)の 5 つの因子(外向性、協調性、誠実性、神経症傾向、開放性)10 項目、リスクテイキング尺度(ギャンブル志向性、状況的敢行性、確信的敢行性、安全性配慮)17 項目、情報処理スタイル(合理性能力、合理性態度、直観性能力、直観性態度) 24 項目の計 3 つのパーソナリティに関する尺度と、サイバー犯罪被害の認識と経験を問う項目で構成された。

3. 結果

パーソナリティに関する各尺度 (性格特性、リスクテイキング尺度、情報処理スタイル) の項目と、サイバー犯罪被害認識と経験間とで相関分析を実施した (表 1)。まず性格特性との相関においては、誠実性とリスク認知に中程度の負の相関が認められた ($r=-.694$)。また、神経症傾向と実際の経験に有意傾向の正の相関が認められた ($r=.534$)。さらに、神経症傾向とリスク認知に強い負の相関が認められた ($r=-.764$)。一方、外向性と協調性、開放性にはサイバー犯罪被害との関連が認められなかった。

次にリスクテイキング尺度との相関においては、状況的敢行性とリスク認知に有意傾向の正の相関が認められた ($r=.516$)。また、確信的敢行性と実際の経験に中程度の正の相関が認められた ($r=.578$)。一方、ギャンブル志向性と安全性配慮にはサイバー犯罪被害との関連は認められなかった。

また、情報処理スタイルとの相関においては、合理

性能力とリスク認知に強い負の相関が認められた ($r=-.755$)。また、直観性能力と実際の経験に有意傾向の負の相関が認められた ($r=-.545$)。一方、合理性態度と直感性態度にはサイバー犯罪被害との関連が認められなかった。

4. 考察

性格特性では、誠実性が高くなると、リスク認知は低くなる。リスクがあった場合でも、気が付かない可能性がある。神経症傾向が高くなると、実際の経験が上がり、リスク認知が低くなる。神経質な人は、ネガティブな刺激への耐性が弱くなることで、リスク認知が弱くなり、実際の経験に遭いやすくなる可能性がある。

リスクテイキング行動尺度では、状況的敢行性が上がるとリスク認知が高くなる。状況的敢行性は、状況に応じて柔軟に対応することが比較的得意な特性のため、リスクを認識しやすい傾向になる。確信的敢行性が上がると実際の経験も上がる。個人内の考えのみを信じ、周囲の情報に耳を貸さない態度は、被害に遭いやすくなる可能性に繋がる。

情報処理スタイル尺度では、合理性能力が上がるるとリスク認知が下がる。選択肢を制限することで情報不足に陥る可能性や、リスクを十分に評価できないことで、対応する能力が低下し被害に遭いやすくなる可能性がある。直感性能力が上がるると実際の経験が下がる。あらかじめセキュリティ対策の知識や技能が少なからずあり、直観的に危険を察知し、実際の経験を回避する可能性がある。